

☆ 各種団体の活動

1	飯野中、女子卓球、県大会3年連続優勝	伊藤 二郎	129
2	富岡一中時代の活動について	鎌田 益實	129
3	北山中、若松四中の卓球部指導から	水戸 昇	130
4	植田中、天栄中の卓球回顧	菊池 進	131
5	玉野中、尚栄中の思い出	佐藤 博	132
6	喜多方三中時代の卓球	岩本 爾郎	133
7	福島商業高、保原高時代の思い出	伊藤 武志	133
8	平工業高校の思い出	大橋 柁	135
9	相馬高校のあゆみ	西郷 徹夫	138
10	懐かしい喜多方工業高時代の思い出	清水 徹	139
11	尚志高校（日大女子工業高校）卓球部	網田 雄治	140
12	「毎日が祭りだった」(喜多方女子高時代を振り返って) ..	斎藤 隆弘	142
13	小高工業高校卓球部の組織と活動について	木村 哲也	142
14	トーアエイヨー卓球部	甚野 道雄	143
15	すみれクラブ、日東紡卓球部の活動	伊藤恵美子	144
16	須賀川信用金庫卓球部の活動	伊藤 平男	145
17	三浦卓球クラブの活動	三浦 勝美	145
18	福卓会の組織と活動	柴田 広道	147
19	セントラルクラブのあゆみ	斎藤 一美	148
20	中島TTSの活動	中島 静	150
21	みやた卓球クラブの活動	宮田 英夫	151
22	勿来卓球クラブの活動	三瓶 清次	152
23	古殿卓球スポーツ少年団の活動	鈴木 良一	152
24	富久山卓球クラブの活動	深谷 秀三	153

飯野中、女子卓球県大会3年連続優勝

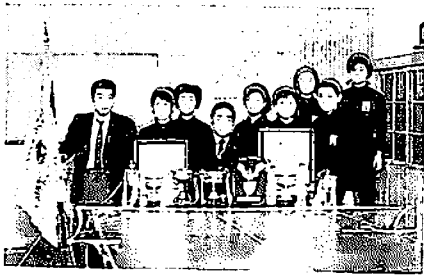
元飯野中教諭 伊藤 二郎

昭和37年、県中体連で本校女子卓球団体は、3年連続した優勝を成し遂げました。町ではPTAが音頭をとり、消防車をくり出し、町内パレードを行うなど大変な盛り上がりでした。

今考えると、3年連続というのは種目にかかわらず非常に困難なことで、県内では福島一中のソフトと飯野中の女子卓球だけだったと思います。

当時の県内は、会津や浜通りが絶対的に強く、1年目の優勝は、3年生3人、2年生1人で、他の学校からマークもされず、案外楽に優勝してしまった、という感じでした。

しかし、1回県で優勝すると大変です。2年生1人が残ったが、あとは卓球部に入ったばかりの1年生です。私が体育主任で、バスケット部の顧問も兼ねていたので、体育館は他の部にゆずり、卓球部は、授業が終わった後、机と椅子を片付け2教室で男女の練習をしました。



2年目の県大会では、男女とも1日目の準々決勝を勝ち進み、2日目は女子の決勝が先で、3年生1人、2年生3人の飯野中が優勝。続いて男子の決勝戦、飯野中対好間中に会場の目が一つになり、2対2のあとの5番目、フルセットで大接戦の末破れ、男女両方の県大会優勝はなりませんでした。

3年目は、前年度優勝チームの3人が残っており、強すぎて中学校では練習試合ができず、福島女子高や成蹊女子高に遠征して力をつけてきましたが、大会1週間前にキャプテンが家の前で足を捻挫し、一抹の不安を持ち

ながら県大会へのぞみました。

県大会1日目の試合は、相手校が負けてもともとと挑んでくるので、私としては3年間で最も苦しい試合となりましたが、2日目の準決勝、決勝は、逆に飯野中に勝てば優勝という意識がでて、こちらは試合がやり易くなり、3対0、3対0と3年連続の優勝を成し遂げることができました。

スポーツは、心、技、体、すべてに全力をそそくことが大切だ、と、今でも思っています。

富岡一中時代の活動について

双葉町前田字坂下59-1

鎌田 益 實

1 はじめに

リターンして早10年になろうとしている。私が中学校に赴任したのは昭和24年で、その間卓球指導に明け暮れた。昭和36年から10年間富岡一中に在籍した。その10年間は、今でも指導体験を生かし、充実した指導がなされたものと思う。自分が果たせなかった夢を生徒に託し、上日も休まず練習の毎日であった。

2 指導事例の一部紹介

当時はスポ少の組織もなく、中学1年生で始めてラケットを握る生徒がほとんどで、その指導から始めるので、指導の時間に余裕がなく、3年生の中頃にはもう、中体連関係の試合が始まるので、いかに効果的に練習をするかが課題であった。例を上げると、当時県内の女子中学生は、一般的にカット対策が甘く、まともに打てる選手は少なかった等から、マニュアル的な指導より現状に即した指導方法をとった。タイプとしては、カットマンが多かったのはその為である。さて、指導にあたっては3年間の指導カリキュラムを作成し、例えばカットマンの指導では、1年生はツツキだけの練習で、変化をま

せて、ノーミス100回を目標とした。ツツキができる頃には、もう1年生の後半となり、いよいよカットの指導に入るので、反撃の指導までの時間がなく、徹底的に守備に徹した。女子は県中体連連勝を重ねていく中で、促進ルールが適用され、守備力ある選手が、促進に持ち込まれて敗退した苦い経験があったので、ツツキに変化をもたせる指導でカバーした。

その頃中学生は、全国大会が認められず、そのため68年、卓連主催の第一回全国少年少女交流大会が、名古屋市で開催され、猪狩栄子さんが優勝した。その後彼女は、高体連全国大会個人優勝、またその後輩の坂本由紀子さんは、高体連全国大会の個人で準優勝した。私の指導方法は、当時としては間違いではなかったと、今も思っている。県中体連関係では、65年度～67年度女子団体が優勝し、68年度女子団体準優勝となり、69年度女子団体が再度優勝した。通算4回女子団体優勝の成績をあげることができた。

3 まとめ

特に、女子選手が上記のような成績をあげることができたのは、先輩・男子選手の協力があったからであり、掛田俊之君（現在東京の中学校長）渡辺雅文君（現コンサルタント経営）等、その他ここに紙面の関係で、名前をあげられないことを謝すが、男子も各種大会、特に郡大会団体で10年間不败のすばらしい成績を残した。私は現在諸役職を退任し、昨年から小中学生相手に卓球指導を始めたところである。

北山中、若松四中の卓球部指導から

喜多方市1-4560-4
水戸 昇

1 卓球部指導の目標 ～人格の形成～

「可能性を求めて」日々自分を磨くことにより「やればできる」実体験を日常生活に生かす。

2 きびしい練習条件

- (1) 北山中～卓球部創設からゼロのスタート
- (2) 若松四中～週3回の体育館の練習

3 創意を生かした練習

- (1) 日本のトップの指導者による意欲づけ
 - ・河野 満氏 ・山中教子氏 ・吉田安夫氏
- (2) 日本のトップ校との合同練習
 - ・野木中（吉沢久治先生には特にご支援いただく） ・下館北中（田村利夫氏）
 - ・春日中（田村明人氏） ・上福岡中（古川裕治氏）
- (3) 会津卓球協会のリーダーによる実践指導
 - ・土屋 弘氏 ・渡部洋一氏 ・松崎 繁氏
 - ・清水 徹氏 ・渡部長二氏 ・斎藤隆弘氏
- (4) 卓球台、マシンの購入（自費）
- (5) 学習、生活、卓球の目標をゼッケンに書く。

4 北山中（S48～51）の主な活躍

- (1) S48卓球部創設3年目で、県中体連女子団体、個人初優勝（千葉治恵…専修大卓球部主将）、東北中体連2位、全国大会出場（予選リーグ2勝1敗）
 - (2) S49県中体連女子団体、個人共に2連勝（須藤奈子…共立女子大）東北中体連2位、全国大会出場ベスト14、個人ベスト16
- 県卓球選手県大会ジュニアの部で高校生相手にベ



昭和53年8月
全国中学生卓球大会（北九州市）男女出場

左寄り小沼、森山先生、須藤、菅家、長谷川、斎藤、遠藤、鈴木、古川選手、水戸

スト4 独占（須藤、樟山、井上、中川）

(3) S50 県中体連女子個人3 連勝（内海光子…藤園女子高）全国大会出場

(4) S51 県中体連女子団体、個人（4 連勝）（東條恵美…大正大学）全国大会でベスト8、個人ベスト16、東北大会3 位、男子団体2 位、個人優勝（武藤雄治…川崎製鉄）全国大会出場

5 若松四中（S53～55）の活躍

(1) S53 県中体連団体男女共優勝、女子個人優勝（小沼ヒロ子…富士通）、3 位（須藤敬子…福島大）（植林俊之…法政大卓球部主将）全国大会、東北大会出場

(2) S54 県中体連男子団体3 位

(3) S55 県中体連男子個人優勝（酒井健二…駒沢大学）団体3 位、女子団体2 位東北大会出場

6 まとめ

それぞれの分野で活躍している卒業生の前途に幸多からんことを祈ります。

植田中・天栄中の卓球回顧

現稲田中学校教頭 菊 池 進

私が卓球部顧問として指導にあたったのは、何もわからない新任校の植田中学校であり、昭和56年から61年までの6年間でスタートである。植田中は、すでに県内で優勝するなど有数の強豪であり、県大会の常連校であった。その時の顧問が、黒澤泰弘先生（現いわき教育事務所指導課長）である。卓球には素人であったようであるが、練習計画が徹底しており妥協を許さない厳しさを持っているとともに、子どもたちから大変好かれている先生であった。私が部活動の指導についての考え方を学んだのは、黒澤先生といっしょに顧問をしたこの1年間で大きい。

さらに、宮田英夫コーチ（いわき市役所勤務）との出会いをあげなければならない。卓球部の指導を通して、また遊び友達として、私が植田中にいる6年間、お付き合いをいただいた。ほとんどが奉仕である外部コーチという立場で、子どもたちを勝たせるために情熱をもって指導した姿には、今でも頭が下がる思いである。東北大会や全国大会などいっしょに動き回ることも多く、よい思い出となっている。

また、植田中学校卓球部で忘れてならないのが、OBや保護者の力である。中体連県大会前の6、7月には、下山田守一さんや田子光政さんをはじめ、その他数多くの先輩方に協力していただき夜遅くまで充実した練習をすることができた。保護者会も充実しており、大会時に県内各地はもちろん県外にまで引率や応援をしていただき、皆で広げる昼食のお弁当が大変おいしかったのを憶えている。植田中学校時代の成績については、次のとおりである。

◎植田中学校の成績

昭和56年度	中体連福島県大会	男子団体（優勝）
57年度	中体連福島県大会	女子団体（優勝）
		男子団体（3位）
58年度	中体連福島県大会	男子団体（3位）
59年度	中体連福島県大会	男子団体（3位）
		女子団体（3位）
	中体連東北大会	女子団体（3位）
		※全国大会出場
60年度	中体連福島県大会	男子団体（優勝）
61年度	中体連福島県大会	男子団体（優勝）
		女子団体（2位）

卓球部指導の2年間のブランクの後（勿米一中では女子バレー部顧問）、天栄中学校に転動し再び卓球部の顧問となる。中学校の近くにある村の体育館を常時使用できる恵まれた環境にあり、素直でやる気のある生徒が多く、ある程度成績を残すことができた。しかし、始めの1,2年は、ピンポンの世界から脱せず、岩瀬地区においても勝つことはできなかった。ようやく県大会に出場し上位に入るようになったのは、選手がそろった3年目あたりからである。5年間に中体連県大会で優勝できなかったことが、非常に残念であるが、5年目に県中地区大会で男女そろって優勝したことや、男子団体が東北大会において、全国大会出場一步手前のベスト8までがんばってくれたことに感謝したい。主な成績については、次のとおりである。

◎天栄中学校の成績

平成3年度	県選抜大会	女子団体（優勝）
4年度	中体連福島県大会	女子団体（3位）
5年度	中体連福島県大会	男子団体（2位）
		女子団体（3位）

玉野中、尚栄中の思い出

現原町第一中学校教諭 佐藤 博

卓球部顧問として玉野中に5年間、尚栄中に8年間勤務しました。この13年間は県中体連の常連校として団体に連続12回出場しました。団体の主な成績は、優勝2回、準優勝1回、3位3回、5位4回、また東北中体連に団体に5回（玉野2回、尚栄3回）出場、その中で予選リーグを突破し決勝トーナメントに進出したのが平6尚英と平9尚栄の2回。個人でも長谷川（平2玉野）、阿部・品（平6尚栄）、小野（平9尚栄）が東北中体連で活躍しました。さらに平成2年度から県中体連に新設されたダブルスにおいては長澤・松山組（平2玉野）が初代優勝ペアとして素晴らしい結果を残しました。その他、全日本卓球選手権大会にも寺島・高玉（平元玉野）、高橋（平2玉野）、阿部（平5尚栄）が個人で、また島田・荒組（平8尚栄）がダブルスで出場しました。これまで結果を残せたのは何れも選手のひたむきな努力と保護者会および卓球関係者のあたたかいご理解と協力があったからです。指導者一人で、しかも中学校の部活動の時間だけで結果を残せるはずがありません。そういう意味で今までお世話になった保護者の方々、および卓球関係者、学校関係者に対しあらためて深く感謝申し上げます。ありがとうございます。ところで、私の指導の根底にあるのは「クラブ出身選手に追い付き追い越せ」という意識です。東北大会や全国大会に参加する選手はクラブ出身者が多いです。しかし、中学校の部活動だけでも指導者が「情熱と夢」を持ち続ける限り全国大会に出場できる可能性は十分あると思います。全国大会に出場したある学校の監督はこう話しています。「私は卓球は初心者であるが子どもにかける情熱は誰にも負けない」と。子どもと共に歩み、そして一緒に全国大会へ行こうという指導者の熱意が必ず子どもに伝わるものです。子どもたちを心技ともに強固なものにするためにどうすればよいか、何をしなければならぬか指導者自身よく考えてみるのが大切だと思います。私は卓球というスポーツを通して県内外のたくさんの人々と出会いました。そして多くの思い出とともにスポーツマンとして真の強者とはどうあるべきか学んだつもりです。部活動は学校の授業で教えてくれない人間として大切なものを教えてくれます。21世紀に向け、子どもたちに「たくましさ」を身につけさせるために今後も卓球を続けていきたいと思っています。

喜多方三中時代の卓球

現二本松第三中学校教諭 岩 本 爾 郎

私の出身中学は、喜多方第三中学校で、顧問の故蓮沼昭先生の熱心な指導のもと、優秀な先輩（五十嵐修二さん、小田切敬さん、佐藤誠さん）やライバルでもあった同級生（渡部洋二君、佐藤隆司君）に恵まれ、部活動はもちろん、家に帰ってからも先輩たちと夜ランニングなどをして、卓球漬けの毎日でした。

厳しいながらも、勝つことの嬉しさは格別だったため、卓球をやめようなどとは思いませんでした。さらに上位を目指すために、卓球の雑誌を毎日のように読み、一流選手の連続写真などを何回も見ては、部屋の中でイメージしながら素振りをやっていたのを覚えています。

この中学三年間の思い出の中で、一番心に残る試合は、昭和54年の福島体育館で行われた東北大会です。大会前に、粉末のスポーツドリンクが新発売され、それを自分で作って夜に毎日2〜3リットルくらい飲み続けていたところ、下痢が止まらず、大会一週間前からほとんど何も食べられない状態で、無気力状態のまま大会に突入しました。りきみがない状態が功を奏したのか、個人戦ではあれよあれよと決勝まで勝ち上り、青森の五所川原二中の小林史幸君に完勝し、優勝してしまったのです。団体戦も決勝まで進み、1番で私がセットオールのに破れ、チームまでもが負け、惜しくも準優勝にとどまりました。

その後、新聞記者に写真を撮ってもらい、翌日の新聞に掲載されましたが、下痢のために頬がこけ落ちて精彩を欠く顔だったため、周りの人に『爾郎は40代のおやじのような顔だ。』と笑われたのを覚えています。

この大会で得たものは、腹に力が入らず、勝ち負けなど何も考えられない無心の境地でやるのが、ナイスプレーにつながるということ。体調を考えた日頃のコンディションづくりがいかに大切かを身をもって感じました。今も現役でプレーしていますが、時折、お酒の飲み過ぎ等で体調を崩して大事な試合に負けてしまうことがあります。この点に関しては、あまり進歩していないようです。

この後の全国大会では、東北大会優勝者はレベルが高かったため、優勝候補の一人になっていたようでしたが、3回戦で敗れてしまいました。ですが、卓球に対する情熱は益々燃えていったのを記憶しています。

福島商業時代の思い出

元福島商業顧問 伊 藤 武 志（52〜58年）

12年ぶりのインターハイ優勝

福商の団体優勝は、昭和40年（鴨原、蓬田、藤橋、横井、全国大会は、中京商業に勝つ）と、52年の二回である。

試合毎にヒーローが

52年は1複6単の試合。大砲は2本、斎藤と今野の複とそれぞれの単で3点しか取れない。よく勝てた、今でも生徒に感謝する。試合毎にヒーローが出た。1回戦は原町、2回戦が若商、次が山場の磐城、今野は負けたが、穴戸がカットを打ち抜き、弱いエースの寺島が大奮起、3-3の後、斎藤からファイナル・ゲームを21-18で勝ち、4-3、準決勝は、喜多方に4-0で楽勝、決勝は喜工、スコアは4-1だったが、すでに6、7番は負けていた。カットマンの主将村上のバックハンド反撃がストレートに5、6本抜けた。優勝の瞬間、村上が踊り上がった。

東北大会では、仙台商業に勝ったが、全国では宮崎義仁エースの鎮西学院に3-4で負けた。翌年53インターハイ（福島、山形開催）の県予選で喜工に敗れ、二位となり、連続出場を逃した。

全国、東北大会出場、ランク入りの選手たち

私がいた7年間で優勝した選手は、斎藤達也が新人戦の単（52年）、複で斎藤・今野組、大内・高野組が連覇（53年、54年）、2位はインターハイ単で左腕の大内（54年）、新人戦団体と、柔らかいドライブの高野が単で（55年）、東北大会の出場者は、渡辺富雄（55年）と清野、森（56年）、二木・中鉢組（57年）、ランクを取ったのは上記の選手のほか砥石（53年）、阿部昭夫（57年）、八巻英樹（59年）だ。

先輩のバックアップ

二木さんをはじめ、渡辺要、嶋原、田中さんなどの先輩が来てくれた、有り難いことです。夏にはアイス、また、カツ丼と御馳走になりました。

思い出の名選手

私がボールを打った、戸田源吉（27年）、大内明雄（28年）、菅野 孝選手について。一枚ラバー、オールラウンドの戸田、ペンカットの大内、最後にペン表の菅野選手。37年の高校3冠王、梨本 甫選手（中大杉並）が卓球レポートに「4回戦、菅野選手の表ソフト・ドライブには大苦戦、3セット、18本で辛勝しました」と語ったそう。また、梅津勝雄選手（31年ペンカット）が県総体、甚野道雄選手（43年、カット）が全日本の県予選で優勝している、双子の紺野兄弟（46年）も良い選手だった。

保原高校時代の思い出

元保原高校顧問 伊 藤 武 志（38～51,59～平9）

保原高校から、5人のチャンピオンが出ている小原公子（32年）、菅野昭平（46年）、斎藤京子（49年）、長澤美奈子（55年）、八巻貴子（60年）の各選手である。

インターハイ初優勝、昭和49年5月、於福島

選手は斎藤英、斎藤京、穴戸、一条、小野、1複6単で、ドライブ、イボ、カットといい構成だった。主将は斎藤美代子、真面目過ぎ、審判がアウトとコールしたのに、「入りました」と自主申告、みんな呆れていた。穴戸はイボ、卒業後トーアエイヨーで活躍した。

最大の敵は便秘と腰痛

一条はカット、必ず一点取ってくれたが、合宿、遠征で、よく便秘になった。エースは斎藤京子、平商 鈴木春枝選手のフォア前サーヴィス後のバックハンド攻めに敗れ、三冠王は逃したが、器用で、投げ上げサーヴィスも上手だった。カットの本田が腰痛のため、2年生の小野を起用した。

5月迄が長かった

県大会の2回戦、小野に4-0、3回戦、県石に4-1、準決勝は箭内選手がいた田村高校、3-3の後、京子がゲーム・オール21-11でエース渡辺を破る。決勝は郡大附属、4-2だった。

雪の若松の新人戦団体優勝後、5月、福島での本番までが長かったのを覚えている。

名コーチのおかげ

卒業生の菅野平吉君（42年）のコーチ術も円熟し、いい選手に恵まれ、OB会からの援助もあり私も、フットワークの練習相手をした。

東北大会出場

私が顧問になって初めて、東北大会に出場したのは、女子複の斎藤・柳沼組（48年）、女子団体は（60、61年）が県2位、複の長澤・佐々木組、単の佐々木まゆみ、池田弘美（63年）、女子団体が2位で東京選抜に（元年）、女子複で金子・八巻組、単で八巻征子（3年）、阿川 愛（4年）、菅野真紀（6年）である。

全国大会出場

菅野昭平が全日本と、インターハイに（46年）高松志



保原高校の優勝のメンバー 昭和49年5月

津子が全日本県予選で2位(51年)、八巻貴子がインターハイと国体に(60年)、長澤智美が高知のインターハイに出場した(2年)。

ランクを取った選手

私が顧問のとき、ランク入りしたのは、酒井則雄(38年)、関根久美子(45年)、全日本予選3位の清水正紀(48年)、斎藤和子(48年)、斎藤秀幸(59年)、相原直美(60年)、佐藤清美(61年)、男子複の斎藤喜和・島組、単の斎藤喜秀、高野英憲(63年)、菅野裕美(元年)、伊藤その美、阿部幸恵(2年)、深谷久美子(3年)選手だ。

平工業高校卓球部の想いで

元平工業高校卓球部顧問 大 橋 矩

(1) 草創期から初優勝を飾るまで

卓球部の創部は何時かさだかでないが、戦災を受けた梅本校舎が再建された年、昭和23年に発刊された平工高新聞によると、校友会予算に卓球部9,650円と計上されている。また、この年の県大会個人戦に出場しているので戦後間もなく創部されたと考えられる。

昭和30年に第1回福島県高等学校総合体育大会が開催され、金成・宮崎組がダブルスに出場したが1回戦で敗退している。

昭和32年初代顧問の高木正行が定時制に移り副顧問の大橋矩にバトンタッチされた。

第4回高校大会が石城地区で開催されたとき地元増として学校対抗に初出場することができシングルスにも草野勝哉・川崎国生・鹿島忠男の2年生トリオが出場したが学校対抗・シングルスともに1回戦で敗退した。

第6回高校大会から学校対抗は地区から3校参加はできるようになり2回目の出場を果たす。

1回戦で対戦した小高農工に1セットも取れず惨敗を喫した。個人戦では門馬正衛(3)が3回戦に進んだが第2シードの橋本(相馬)に敗れた、山野辺隆一(2)も2回戦に勝ち上がったが第5シード富田(福島)に楽敗でシードの壁の厚さを感じさせられた試合だった。

翌年の第7回高校大会から学校対抗は地区から4校参加できることとなり地区予選を通過するのが楽になった。この大会でまた1回戦で小高農工に当り、今度は3-2と雪辱して3度目の出場で嬉しい県大会初勝利をあげた。2回戦も喜多方商工に3-1で勝ち、準々決勝で第4シード田村と対戦する。エース対決となったトップで山野辺隆一が米川に2-0と勝ち、さい先の良いスタートであったが1-3と逆転されてしまった。

この年の県総合体育大会で山野辺隆一が第1シードを破って準々決勝に勝ち進み、敗退するがベスト8で平工初のランクプレーヤーとなった。

第8回高校大会では準々決勝で優勝した相馬高校と対戦、2-3で負けたが互角に戦うことができたことで、この頃から県大会優勝を目標に掲げて一層練習に励むようになった。

第9回高校大会は学校対抗で磐城高校が優勝、平商業が2位、平工業3位、女子では磐城女子高校が優勝、磐城第一が3位と石城勢が頑張り個人戦でもダブルスの佐藤・佐藤(平商)・斎藤・磯上(磐女)が優勝、岡部・石井(磐一)が2位、シングルスでも伊藤昌夫(平工)が優勝、平商業の佐藤兄、佐藤弟が2位、3位に入賞した。

伊藤昌夫は平工業初の優勝者で東北大会と京都インターハイに出場した。それまで高校大会は種目別選手権大会として各地で開催されてきたが昭和38年から同一地区で開催することになり名称も全国高等学校総合体育大会(インターハイ)と呼ぶようになった。この記念すべき第1回京都インターハイに初出場に参加できたのはラッキーであった。

昭和39年は東京オリンピックの年で県総体が6月に行われた。学校対抗で須賀川、原町、郡山商と連破して決勝に進んだが福島商に0-3と敗退する。

学校対抗で初めて東北大会に出場した。また、シングルスで井上健一が準々決勝で第1シードの浅坂(会工)を2-1下し、準決勝、決勝はともに2-0で勝って初優勝を飾った。

この年に行われた第10回高校大会の団体メンバーは主将が井上健一(3) 嶋野幹雄(3) 鈴木雅治(3) 小川正浩(2) 鈴木啓(2) 桜沢秀二(1)、予選で磐城に勝って初優勝して臨んだ県大会は第2シードだった。2回戦で福島工3-0、3回戦は安達3-2、準決勝県北1位で過去2回優勝している強豪、福島であった。①井上1-2小浜②桜沢1-2③井上・小川2-0河野・小浜④嶋野2-0河野⑤小川2-0阿部、前半に2点先取される苦しい試合であったが、④番嶋野が22-20,23-21と福島のエース河野を下す大金星がこの試合の勝利を決めた。

決勝は東北工と対戦、桜沢(1)の活躍もあり3-0で勝ち念願の学校対抗で初優勝を飾ることができた。

インターハイは伊勢市で行われ、2回戦で地元津工業に3-2で勝ち、初勝利を挙げて3回戦に進んだが北陸ブロック優勝のシード校高田工に0-3で敗退した。

(2) 平工業卓球部の全盛期

各種県大会の優勝記録のみを挙げる。

①高校総合体育大会

学校対抗 39,43,45,46,54(年)・ダブルス 40,43,46,48,51・シングルス 38,40,41,48,51,54,55

②高校新人大会

学校対抗 41,45,46,49,50,52,53,54・シングルス 30,47,50,53,54

③総合体育大会

学校対抗 50,54・シングルス 39,47,48,51,54

(3) 個人戦インターハイ出場者

38 伊藤昌夫(S) 39 小川正浩(S) 40 鈴木 啓(W-S) 小川正浩(W-S) 41 桜沢秀二(S)

42 山野辺栄、吉田峰雄(W) 43 渡辺勇、日向寺良幸(W)、佐川澄男、山田由勝(W-S)

45 原田政和、佐藤博美(W)、黒沢義信(S)、46 山口健二、佐々木幸雄(W)

47 酒井正孝(W)下山田守一(W-S) 48 下山田守一(W-S)水野幸彦(W)

50 江尻 昭(S)、下山田守夫(S) 51 下山田守夫(W-S)高田篤、(W)馬場幹雄、生田目孝(W)

53 田沢裕浩(S) 54 小島篤(S)、田沢裕浩(S) 55 鈴木誠一(S)、大平隆司(S)

60 澁谷博光(S)

学校対抗は昭和54年以降は決勝リーグに残るが、2、3位、インターハイには澁谷の後は出場の機会に恵まれていないのは淋しい、名門平工業の復活を期待したい。

(4) 卓球部O・B

母校卓球部の向上・発展と会員相互の親睦を計る目的で設立総会が開かれ、趣旨は現在も引き継がれている。

期 日 昭和53年1月1日 13:00

場 所 太平ガーデン いわき市平中塩字石川1

発起人 山野辺隆一 伊藤 昌夫 鈴木 雅治 鈴木 啓 桜沢 秀二
清野 久司 山野辺 栄 小川 正浩

◎設立当初の役員

会 長 山野辺隆一

副会長 伊藤 昌夫、鈴木 雅治

幹 事 鈴木 啓、山野辺 栄、市井 伸二、澁谷 栄、桜沢 秀二、清野 久司、
吉村 富夫

監 査 斉藤 申次

事務局長 小川 正浩

事務局 母校卓球部、小川正浩宅

◎現在のO・B会役員

会 長 下山田守一
副会長 馬場 幹雄、緑川 雅之
幹 事 伊藤 栄弘、加藤 恭、鈴木 誠一、曾我部恭司、田巻 幸一、鈴木 秀樹、
齊藤 兄弘、宮島 秀昭、澁谷 博光、三浦 健一、熊田 清
監 査 下山田守夫、片寄 勇二
事務局長 根本 春彦
次 長 上遠野広一
事務局 旧平安卓球場内（いわき市平堂前3）

(5) 平安卓球クラブ

学生時代、平安卓球場で練習をした仲間が卒業後平安卓球場に集まり、旧交を温め卓球大会があると平安卓球クラブとして参加した。特に平工業の選手が在校中或は卒業後に下宿していた関係もあり、卓球場井戸川さんご夫妻にお世話になった平工業卓球部OBの選手が多くを占めている。ご夫妻の没後もご子息の好意によって旧平安卓球場の自宅を使用させてもらい平安クラブと称する親睦会を作り、いわき地区各高校の卓球部OB・OG有志が、いまでもご夫妻を偲びながら旧交を温めている。連休・盆・正月になると学生時代に平安卓球クラブで練習した選手達が帰郷して訪れるので賑う。

(6) 回 想

昭和25年平工業に奉職、高木正行初代卓球部顧問が隣席だった関係から卓球部を手伝うことになる。昭和32年卓球部顧問となる。この年に、いわき卓球協会（当時、石城卓球協会）の設立総会があり、高校の卓球部顧問は協会理事となる。

平工業は地理的關係から卓球会場を引き受けることが多く協会の仕事も手伝うことになる。

今までの基会所通いもやめて卓球一筋に頑張るようになったのもこの頃からであった。大会では進行係が多く、その後協会の事務局を担当した、昭和39年山崎勲委員長のあとを受け、高体連専門部の地区委員長になる。この年は、念願の学校対抗で初優勝を飾った年でもあった。その後、選手にも恵まれ県内では卓球の名門校と言われるような実績を残すことができた。

昭和45年に齊藤委員長のあとを受けて福島県卓球部専門委員長に就任、53' 福島インターハイは県外種目となったが多くの先生方の協力を得て選手強化に専念でき、高校生のレベルアップ少しは貢献できたのではと思っている。

平工業は52年の新人戦に優勝し、2次強化指定校としてインターハイ出場を目指したがエース高橋典彦が過労による急性腎炎で血尿がでたアクシデントのため決勝リーグで敗退する不運があり涙をのんだ。翌、昭和54年の平工業は強化が実った最強のチームで全員ランク選手で県総体でベスト8に入った坂口祐二が団体戦に出場できない豪華さであった。この年の東北大会で強豪青森商業に4-2で勝って、準決勝で優勝した三本木高校と互角の試合ができた。東北高校選抜大会の準決勝でも優勝した三本木高校と対戦、桜田監督に実力を認められたほど堂々の三位であった。

小川正浩・鈴木啓・桜沢秀二を擁した高校大会2連勝を目指した11回大会も桜沢（2）が出場できず福島商に2-3で敗れる。ダブルス シングルスに優勝唯一3冠のチャンスを逃した大会でもあった。

選手の思い出は尽きないが平工業の最強選手を挙げると現O・B会長の下山田守一選手である。

インターハイは3回戦で1-2とランクに入った木下（和歌山・海南）に敗れたが東北総合体育大会ではインターハイ3位になった大沼（山形・寒河江）・東北高校大会2位の成田（青森・青森商）に勝って少年男子2位の原動力になった。

当時レベルの低かった福島県の選手としては驚くべき大活躍であった。卒業後川崎製鉄に入社し実業団選手として活躍、全日本選手権でもランキングに名を連ねた。

私は、昭和57年からは東北高体連卓球専門部理事長として東北を代表し、全国高体連卓球専門部常任理事となって運営に参画するとともに、高体連卓球専門部選出の日本卓球協会評議員を6年間勤めた。

昭和50年代の後半は校務と県・東北・全国高体連卓球専門部・同窓会事務局等の仕事に追われる毎日出張も多かった。卓球部の選手が練習を終えて帰るころはまだ仕事が残っていて家に持ち帰るこ

との繰り返しで今考えるとよく病氣もせず頑張れたと思う位です。

母校、平工業に勤務して卓球と出会い、良い選手達に恵まれ、また卓球を通じて素晴らしい方々と巡り逢うことができて幸せであったと思っています。

平成元年3月無事定年退職しましたが、再就職して今でも勤務しています。退職後も平工業卓球部OB、平安クラブの若い皆さんと時折旧交を温めておりますが、これも卓球が取り持つ縁と感謝している毎日です。

卓球の想いでは尽きませんが、今迄頂いたご厚情に感謝しながら皆さんのご多幸をお祈り申し上げます。

相馬高校のあゆみ 創立百年記念誌より抜粋 一部活動のあゆみから

元相馬高校教頭 西 郷 徹 夫

卓球部～昭和30年代、県の頂点に立つ～

相馬高校卓球部は、当時実際の技術上の指導にもあたられた森口教諭を部長とし、その基礎作りが始められた。創部間もない昭和24年には、只野喜弘選手が東北大会に出場している。

昭和30年に開催された、第一回福島県高校体育大会において、本校卓球部は第一期黄金時代を築くこととなる。すなわち、個人戦シングルスにおいて佐原昌幸選手が優勝、梅原哲二選手が準優勝、ダブルスにおいても佐原・梅原組が優勝を果たしている。団体戦でも準優勝となり、青森での第九回東北高校卓球大会においては団体、個人とも三回戦まで進出している。

続く昭和31年の高校体育大会県大会においても諸星光男選手がシングルスで優勝するなど活躍している。諸星選手は翌年の福島県総合体育大会においても準優勝し、国体に出場、活躍をしている。次に『東北高校卓球選手権大会記念誌』に寄せられた諸星氏の思い出の記事を引用させていただく。

「卓球との出会い、福島は相馬市（旧中村町）の町立中学校の二年生の時、野球では見込みがないので、卓球を始めました。

地域の中学では強い方で小生は補欠の存在でした。しかし、遅く始めた小生は徐々に面白くなり、高校進学準備もせず、下級生と卒業時期まで休むことなく練習を続け、昭和30年4月相馬高校に入学、上級生とは技の差があり、ほんの時々手合わせをして貰える程度でした。

一年生の夏休み過ぎから上級生は進学の準備で練習場には来なくなり、その時只一人全日本硬式ジュニアに出場が決まっていた梅原哲二（中大卒）が小生に教えながら練習台として大会に臨み、福島県の田舎高校から第五位とすばらしい成績を残されました。

小生も感動し、更に練習に力が入り、二年生の春、県の大会には何とか人数を集め参加し、小生がシングルス優勝したため、廃部は何とかまぬがれ、後輩（中学生）の事も考え、練習に明け暮れました。

学校の部予算も少なく、大会出場は春のインターハイ・国体県予算のみで、全日本硬式ジュニアは認めて貰えませんし、全国大会に出場してもたかが一、二回戦でしょうし、まだこの家庭でも経済的な余裕がありませんでした。

小生の練習は他流試合もしないし、学校のみでの練習で休みになると来て下さる梅原、西郷（福島大一現県協会会長）の大学生のボールと触れることが待ち遠しく又教わったこと・感じたことを、次に来る時までマスターすることを心がけました。

このような環境で三年生の時東北で優勝した訳ですが、正直なところ他流試合もしてませんでしたし、地元で強い大人もいませんでしたので自分の実力がどの位わかりませんでした。ただ言えることは年に数回レベルの高い指導を受けていたのだと後になってわかりました。

小生三年生になり、待ちに待った後輩が五名入部し、教えながら小生の練習のプレーの幅も広がったような気がします。

二年後その後輩達がシングルスは準優勝でしたが、ダブルス・団体優勝を果たしてくれました。」

当時の部の活動内容が偲ばれる文章である。ここで登場する「後輩」が、昭和34年に大活躍する門馬・反畑・木幡・佐々木等の強力選手団である。福島県高校体育大会において団体戦優勝、個人でもシングルスで門馬が優勝したほか、二位から四位までを独占、ダブルスにおいても相馬ペア同士の決勝戦を演じ、門馬・反畑組が優勝と、完全に県を制圧する。続く東北大会においても団体戦優勝、ダブルス木幡・佐々木組優勝、門馬・反畑組第二位と万丈の気を吐いた。しかし、全国大会においては、その壁は厚く、慶応高校に敗退する。

この中で、反畑秀彦選手は相馬高校卒業後、日本大学法学部に進学。一年時よりレギュラーとして活躍し、その年の全日本卓球選手権大会においてダブルス第八位、続いて都市対抗（東京代表）全国大会二位、全日本学生選手権ダブルス三位、関東学生選手権シングルス二位、東日本学生選手権ダブルス三位、さらに大学四年の時は日本大学副キャプテンとしてチームを関東学生リーグ春・秋優勝、全日本学生選手権王座獲得に導いている。卒業後三井生命に入社、昭和42年には第29回世界卓球選手権スウェーデン大会に全日本代表選手として参加、単・複とも三回戦まで勝ち進む活躍を見せている。

当時の監督は新妻教諭で、毎日必ずと書いていいほど、練習場に使われた講堂に姿をあらわし、椅子に腰をおろし、じっと練習風景を見つめていたことが、何よりも各選手の励みとなり、練習を重ねた結果がこの成績を生み出したといえる。

その後、昭和35年、36年には伏見利博選手が県大会において二年連続シングルスで優勝を果たすという快挙を成し遂げ、団体戦でも36年、37年と県大会で優勝をしている。さらに昭和41年にも加藤選手を中心として団体優勝を果たしている。これらの活躍の陰には部員達の練習に明け暮れたゆまぬ努力があったことはもちろんだが、母校を巣立った先輩達の励ましと指導があったことを忘れてはならない。西郷徹夫現福島県卓球協会会長は、大学生時代から後輩の技術的、精神的指導を続け、その功績は真に大きい。

昭和47年、福島県高校体育大会で、団体では第七位であったが、個人戦ダブルスで佐々木・鈴木組と南部・門馬組が東北大会出場を果たす。その後はめざましい活躍からは遠ざかっているが、現在、現役部員達は講堂において無心にボールを追い、練習を重ねる日々を送っている。

懐かしい喜多方工業高校の思い出

現福島県立小高工業高等学校長 清水 徹

昭和40年4月、始業式は南前庭で行われた。体育館もなく、校舎や実習棟も建設途中で体育の指揮台上から新任の挨拶を緊張の中で行われた。

翌年の41年度に同好会から卓球部に昇格し、卓球台を2台購入した。顧問は、喜多方女子高の初期の黄金時代を築いた満田三平先生と、強豪喜多方商高の冠木常雄先生がいて、私を含め3人で試合をして勝った者がやることになった。たまたま勝ったのが私で、今後は若者に託してと言ってその夜喜多方の街を3人で飲み歩きしたのも懐かしく思い出される。御二人はもうこの世にはいない。

初めての会津地区大会は3年生を主体にして臨んだ。団体戦も個人戦も歯がたらず、ほとんど一回戦で敗退だったが、新一年生の目黒新一君だけが代表決定戦まで行って惜敗した。全試合終了後のミーティングでその目黒君がいないので探したところが、校舎の隅でしょんぼりうなだれていた。彼は只見出身で何かの手違いで喜多方に来てしまった。負けた悔しさと、進路の後悔で泣いていたのだ。重い口をやっと開き、全国大会に出場するのが夢という。とてつもないことを言い出した。驚いてばかりもしてられないので、下宿のおばさんに頼み込み、目黒君と揃一枚の下宿生活が始まった。

次の会津総体からは1年生であろうが、校内で強い順から選手を選びチームを編成することを提案した。3年生が猛反対して来たが、考えを変えなかったため退部者が続出した。方針に従った者だけが厳しい練習を続けることになった。当時1年生の中には山都から数人の有望な生徒もいて、1年生だけでもかなりのチームに成長した。ただ目黒君自身の目標が高く、体育館が出来てからは、週2回練習出来

ない日には10K目黒の長距離マラソンとトレーニングが続き、私の目からもかなり厳しい練習であったため、一人、二人と退部者が続き彼が3年生の時には最上級生は二瓶幸治君と二人だけになってしまった。3年目の地区予選は母校喜多方工高が会場となった。目黒君が選手宣誓を行ない念願の個人優勝と初の団体戦3位の原動力となった。3年間の努力が稔り、県大会の相馬高校では10名の団体が意気揚々と行進したものである。

団体戦では残念ながら1回戦で敗退したが、目黒君は夢の全国大会には届かなかったが、ベスト8入りし、東北大会に出場することになった。

当時の就職試験は6月に実施されていたが、東北大会が重なり、特段の計らいで試験日を後日に延ばしていただくことになった。八戸での大会は青森の選手に負けてしまったが、表情はさわやかだった。就職試験には合格し、晴れて日立本社営業所へ内定することが出来た。学業と部活の両立を実証出来たことで自信を深めたのである。

昭和44年に目黒君が卒業した。私事で恐縮ですが昭和45年の春に結婚し、部活も特に厳しいものではなかった。そんな時の昭和46年度新入生の中に江川淳一君が入学してきた。彼は文字通りピンキチである。今までの卓球部のあらゆる常識を打ち破っていった。まず球拾いを拒絶し、ボールを打ちたいと言いつ出した。当時は入学後1～2ヶ月はボール拾いが常だったが、本人は入部後5～7日目に言う事を聞かなかった。練習は7時を越し8、9時にもなった。彼が3年になると新入生の木村義栄君を誘い、朝は7時から、夜は10～11時に到るまでカット打ちに明け暮れた。私は毎朝警備員か教頭から小言を言われない日はなかった。そんなある日警備員さんが根負けして、気の済むまで練習せよ、ただし、消燈と旋錠は責任をもってやれば協力するので、最後までやり通せと激励された。こうなれば時間を忘れて夢中でボールを打っていた。

このチームは2年の新人戦で県大会で3位に団体戦入賞し、江川君も3位に入り、3年のインターハイには団体戦ともども大いに期待されていた。そんなすばらしいチームだったが、会津地区大会の3回戦で会工によもやの敗退、慰めの言葉も見つからず呆然としていた私の顔に一滴の水滴が落ちてきた。上で応援していた2年生の悔涙であった。この涙に今まで以上に胸の奥底から熱い闘志が沸いてきた。生徒達に二度とこの悔涙を流させないことを強く、強く誓ったのである。

江川君は個人戦で伊勢のインターハイに出場し、全国大会初出場の感動を与えてくれた。この感動を新チームの全員に与えてやるのが私の使命であるとともに意を強くしたのである。

それからは部創立当時の目黒君や1年先輩の江川君の意志を継ぐ猛練習が始まった。優勝して全国大会に出場を夢みて、福島県一、全国にも誇れる練習から昭和49年度県高校総体で初優勝、その後3連覇し、1年おいて53インターハイ地元開催にも出場できたことは夢のようであります。

今、出会った一人一人の生徒を思い出し、地元や保護者の暖かい励ましを感謝しながら昔を懐かしんでいるところです。

尚志高校（旧日本女子工業高校）卓球部

旧日本女子工業高校顧問 網 田 雄 治

- 創立日 昭和39年4月
- 指導者 昭和45年4月～昭和59年3月
網田 雄治、鈴木 正子
昭和59年4月～現在
寺西 礼子、橋本 裕
桑原 要勝（平3～5）
- 現在の部員数 17名（男10名女7名）
- 活動状況

開校と同時の創部で、教室や実習室を練習場にわずか1台の卓球台で練習をしなければならなかった時代を経て、顧問の熱心な指導の下、徐々に力をつけていった。

昭和49年、初めて県新人戦団体戦において3位に入賞、個人戦で佐藤尚美が初優勝を遂げた。以後50年には、佐藤尚美、桑原優子の2名がシングルスで全国大会に出場、51年には、県大会団体3位、54年、55年2年連続新人戦で団体優勝をした。

昭和55年度の高体連創立30周年記念大会において、団体準優勝、ダブルスで安藤ひとみ・志賀豊子組が初優勝。高知インターハイにおいては、山梨、愛知の代表を破り3回戦まで進出した。これ以後、東北大会、全国大会、全日本等の大会出場への足がかりをつくった。科学的、合理的な練習を行い、講習会等にも積極的に参加した。指導者は、北京や上海の業余学校に技術や指導法を学びに行った。また、部員が毎日つける日記と毎月発行される「卓球部だより」は、現役と卒業生の絆となっている。

顧問は、昭和59年に網田から寺西に引き継がれ、県のトップ水準を維持した。卒業後は、卓球を生かして一流私立大学に進学する選手が輩出され、県卓球界において高く評価されるようになった。

平成3年指導者に桑原要勝を招き、指導体制を一層充実させ、平成3年度の県高校総合体育大会において念願の団体優勝、シングルスにおいては菊地弓子が県のタイトル全とおさめる成績をおさめ、全国大会に入賞するなど尚志高校卓球部の名前を不動のものにした。

○卓球部成績（団体、個人、県大会優勝以上）

S49年度	県高校新人戦個人	佐藤 尚美	優勝
S50年度	県総合体育大会団体		優勝
S51年度	県高校学年別大会	沼田 弥生	優勝
S54、55年度	県高校新人戦団体		優勝
S56年度	県高校総体ダブルス	安藤・志賀組	優勝（全国大会3回戦まで進出）
S56年度	国体県代表選手になる。	志賀 豊子、吉田 朱美	
S62年度	県高校選抜大会団体		優勝
H3年度	県高校総合体育大会団体		優勝
H3年度	全日本県予選ジュニア	菊地 弓子	優勝
H3年度	県高校新人戦個人	菊地 弓子	優勝
H3年度	全国高校選抜大会個人	菊地 弓子	第3位
H4年度	県高校総合体育大会個人	菊地 弓子	優勝
H4年度	県総合体育大会個人	菊地 弓子	優勝
H4年度	東京卓球大会個人	菊地 弓子	第3位
H4年度	県高校新人戦個人	菊地 弓子	優勝
H5年度	県高校総合体育大会個人	菊地 弓子	優勝
H5年度	県総合体育大会個人	菊地 弓子	優勝
H5年度	全日本県大会ダブルス	菊地 弓子	優勝



1980年（昭和55年）2月
県高校新人戦・団体初優勝
（棚倉町体育館）

「毎日が祭りだった」(喜多方女子高時代をふりかえって)

現郡山東高等学校教頭 斎藤 隆 弘

わたしが、喜多方女子校につとめたのは、昭和49年の4月からでした。その頃喜多方には、水戸昇(北山中学)、蓮沼昭(喜多方三中)、清水徹(喜多方工業)先生という、独自の理論を持った希有な、見事な指導者がいました。ただ高校女子だけが県で勝てないという状況だったと思います。そんな周囲の環境に励まされながら、先生方の教えを請いながら、卓球を始めました。土曜、日曜になると、練習場は近くの一般の卓球愛好家の皆さんでいつも活気に溢れていました。生徒のためにというよりは、自分の楽しさのために卓球にのめり込んでいったと思います。卓球に関して全くの素人だったわたしは、試合に負けると誰にでもアドバイスをお願いしました。練習のこと、試合のこと、用具のこと、精神面のこと、その道の達人という人がいると誰にでも可能な限り尋ねました。勝ちたかった一心だったのです。

それにしても、試合のあとの先生方との、あるいは一般の愛好者との議論はどんなに楽しかったかしれません。酒を交わしての卓球談義がどんなに充実した時間であったかしれません。

喜多方女子高校には、12年間勤め、さらに転動しても4年間卓球の指導に通いました。その4年間すべての県の団体に優勝することができました。Hという日本一(わたしは今もそう思っています。)の指導者との出会いが、わたしの指導者としての技量を大幅に高めたのです。これで夢にまで見た日本一になれる。そう思ったときは、卓球に夢中になれる環境ではありませんでした。

わたしは今、転動して郡山東という高校に勤務しています。そこには、わたしが今まで見たこともない才能の生徒たちがいます。熱心なクラブの指導者が辛苦して育てあげた選手たちです。これほどの選手を毎年育てあげる、その卓球に対する情熱と、指導力は見事というほかありません。しかしそんな選手たちを育てあげる環境が、高校にはありません。高校の熱心な指導者が少なすぎるのです。これでは、選手が県外の卓球有名校を目指すのは当然です。ぜひ高校の優秀な指導者を育てる作業を根気強くすべきだと思っています。

卓球に夢中であつたあの頃は、いつも祭りでした。「卓球」という祭りを毎年、毎日楽しんでいたように思います。あの頃の祭りの関係者とのひとときがわたし自身の現在の最高の楽しみになっています。ぜひ日本一の卓球の熱心な県になってほしいと思います。

県立小高工業高校卓球部の組織と活動について

現福島高等学校教諭 木村 哲也

私は現在、県立福島高等学校に勤務していますが、前任校である小高工業高等学校は私にとって大変思い出多き学校であり、大変貴重な経験をすることができました。小高工業卓球部は県代表選手や県代表監督を数多く輩出してきました。齋藤一美さん(現県強化部長、福島国体成年女子二部優勝監督)、佐藤敏行さん(県総体シングルス四連覇、監督としても豊間中、飯館中で団体全中出場)、原晃さん(東京選手権男子サーティーの部優勝、福島国体成年男子一部五位入賞選手)などが代表的なOBとして挙げられます。また、毎年2月にはOB会主催の浮舟杯という大きな大会が開催されます。このように小高工業卓球部は大変伝統ある部であります。そして、生徒たちも全国入賞を目標に日々の練習に励んできました。ここで主な成績を振り返ってみたいと思います。

平成6年度

インターハイ 男子学校対抗ベスト16

大越 弘之、齋藤 洋一、柴田 俊生、遊佐 充裕

東北選抜卓球大会 優勝

齋藤 洋一、柴田 俊生、佐藤 正光、遊佐 充裕

平成7年度

福島国体少年男子団体3位入賞 遊佐 充裕

全日本ジュニア5位入賞 遊佐 充裕

東京選手権ジュニアの部優勝 遊佐 充裕

平成8年度

東北高校卓球選手権大会ダブルス2位 遊佐 充裕、齋 藤亮組

国体少年男子団体5位入賞 遊佐 充裕

国体少年女子団体5位入賞 三原 香織

全国選抜卓球大会 女子学校対抗出場 三原 香織、伊藤 絵美、大峯 礼、庄司由希子

平成9年度

インターハイ 女子学校対抗出場 三原 香織、伊藤 絵美、大峯 礼、庄司由希子

国体少年女子団体5位入賞 伊藤 絵美

平成10年度

インターハイ 女子学校対抗出場 八巻 山美、大峯 礼、庄司由希子、門馬 千恵

わたしがこの伝統のある卓球部の顧問を5年間も努めることができたのはOBの皆様や学校内の先生、保護者など、周りの方々による支援のおかげであります。本当にありがとうございました。

トーアエイヨー卓球部

監督 甚 野 道 雄

1. 設立年月日 昭和22年10月

2. 役 員 部長 斎藤 閑朗 監督 甚野 道雄 選手 女子5名

〈卓球部の始まり〉

*トーアエイヨー卓球部は、昭和22年10月に発足した。当時の社長がスポーツに対して理解があり、また下記の理由で数あるスポーツから卓球が選ばれた。

①雨が降っても、雪が降ってもいつでもできる。

②スペースをあまり取らない。

③怪我も他のスポーツに比べて少ない。

④年齢に関わらず、男女を問わず、その人なりにできる。

⑤企業のイメージとして、卓球がっている。

〈卓球部の成長の課程〉

*卓球部が始まった頃は、部員の中心は中学卒の初心者でしたが、昭和26年から高卒の卓球経験者が入社するようになり、チームのレベルアップがされました。その結果、労組大会の東北大会で昭和26年～昭和35年の間、10年連続優勝の快挙を成し遂げました。

また、昭和49年の全日本実業団卓球選手権大会軟式女子の部で決勝まで勝ち進み、優勝まで後一歩というところまでいったことが、やればできるという大きな自信につながり、その後も実業団において上位入賞をはたし続けている原点となっています。

3. 成績(団体)

昭和26年～35年全国労働組合卓球大会 女子チーム 10連勝を達成

昭和49年 全日本実業団卓球選手権大会 軟式女子の部 準優勝(東京都)

昭和58年 " " " (草津市)

昭和62年 " " " (上尾市)

昭和51年 全日本実業団卓球選手権大会 軟式女子の部 第3位(千葉市)

昭和53年 " " " (東京都)

昭和54年 " " " (米子市)

昭和55年	〃	〃	〃	(上越市)
昭和56年	〃	〃	〃	(旭川市)
昭和59年	〃	〃	〃	(上山町)
昭和60年	〃	〃	〃	(新南陽市)
昭和61年	〃	〃	〃	(岐阜市)
平成2年	〃	〃	〃	(青森市)
平成10年	〃	〃	第5位	(大分市)

*平成2年 文部省より「社会体育優良団体」として表彰される

(個人)

昭和58年	千葉市	全日本軟式卓球選手権大会	安藤ひとみ・内藤由里子	女子複	準優勝
平成元年	甲府市	全日本軟式卓球選手権大会	星 智恵・石川美智子	女子複	第3位
平成10年	高崎市	全日本軟式卓球選手権大会	金澤 有・三瓶 直美	女子複	第8位

4. 年間予算額 (250～300万円)

5. 今後の抱負 現在少ない部員数なので、以前の様に活気あふれる部作りをして行きたいと考えております。

すみれクラブの活動

代 表 伊 藤 恵美子

昭和50年代前半は、まだ主婦がスポーツをするということが、そんなになかった時代でした。始まりは、福島市内の小関さん、母袋さんなどが最初に全国レディースに出場されたらしく、その翌年に声をかけて頂き、初めてママさん(家庭婦人)として全国大会(昭和54年第2回)に行ったのがきっかけでした。

その後、福島市に家庭婦人連盟ができ、春と秋のリーグ戦が始まりました。そこで、私と同級生だった菊地さんに声をかけ、高校時代の仲間や実業団でやっていた仲間に声をかけ、すみれクラブができました。卓球選手権大会経験者が集まったので、常にAクラスとしてやってきました。でも、子育てをしながら、家族に迷惑をかけないことをモットーにし、卓球台の側に寝かせたり、おもちゃやミルクを持っの練習風景、その子が今や成人を迎えています。こんなお母さんも、時には緊張することもありかなと試合に出るようになりました。

でも、練習はなかなかできず、月1～2回するのが精いっぱいでした。しかし、平成10年広島大会の全国レディースに久しぶりに出場して、悔しさと楽しさを味わいまして、今は週1～2回の練習に変わりました。最近の仕事をもつお母さんが多くなり忙しい日々ですが、時間を作り集中するのもいいものです。その後の会話がそれ以上に楽しいもの、現在は12名の部員で20歳代～50歳代と卓球を通して勉強をしています。目標も市大会から県大会へ、今は全国大会へと夢を広げています。

事務局 伊達郡保原町字元木88-1 リーダー 伊藤恵美子

日東紡卓球部の活動

元部員 伊 藤 恵美子

昭和44年私が東京にいる時、女子の実業団チームを作りたいと日東紡からお話がありました。地元には、東亜栄養という実業団チームがありましたが、日東紡チームを作ることにしました。一つしかない実業団よりライバルを作れば、福島の一般の卓球人口の底辺拡大とレベルアップもできると思いました。

昭和45年、地元の高卒の6名と私と男子の数名でスタートしました。

翌年(昭和46年大阪)の実業団大会で、当時5連勝していた大成信用組合に負けはしましたが、ベスト8に入賞したことは今でも忘れられません。木ベラの紺野(成女)、松浦(西女)がいました。その後、奥山節子(福女)が入社、岩手国体の代表になるなど日東紡チームも少しずつ強いものになってきました。

その後、相女から天野和子、鈴木礼子、星幸子、西女から吉田強子、石川宣子、成女から長尾洋子、磐女から佐藤久美子、安女から藤田知子、増子佳絵、喜女から小田切佳代、佐藤誠子等ほかにもたくさんの選手がいました。

しかし、選手の確保が一番大変な仕事でした。

そんなところへ昭和50年に男子の安達広や星哲太郎など男子の入部で女子の強化が促進され、群馬国体の代表に長尾洋子、鳥取国体の代表に佐藤久美子選手が選ばれました。

昭和54年には、郡山市で開かれた全日本社会人卓球選手権大会で、安達・星組のダブルスが3位に入賞する快挙がありました。これで日東紡に男子の実業団チームもできあがり現在に至っております。

現在は、女子部は休部になって残念に思いますが、またいつか若い力で新しい実業団ができることを望んでいます。

主な成績

男子	平成7年全日本実業団大会	1部トーナメント	第3位
女子	昭和46年全日本実業団大会	硬式女子の部	ベスト8

須賀川信用金庫卓球部の活動

代表者 伊 藤 平 男

- 設立年月 平成50年4月
- 役員 部長 高原 高
監督 伊藤平男
選手 男子 7名
- 成績
平成7年全日本実業団大会軟式男子 第6位
平成9、10年全日本軟式大会 小塩 浩 男子シングルス 優勝

三浦卓球クラブの活動

代表者 三 浦 勝 美

〈設立年月日〉 昭和59年11月1日
〈役員と指導者〉 石 井 徳 寿 長谷川 賢 治 渡 辺 悦子 菊 地 純 代
〈活動状況〉

・構成人員	小学生	中学生	高校生	計
男子	7	4	3	14
女子	10	12	4	26
計	17	16	7	40

・成績

△団体(1)全日本クラブ卓球選手県大会 女子4部…10回連続出場 日本卓球協会 特別表彰
優勝4回 準優勝4回(平10)

(2)全国ホープス卓球大会 優勝(平成元年)

△活躍した選手

○藤田 由希

S62	全日本卓球選手権大会	カブ女子	優勝
H元	"	ホープス女子	優勝
H元	第4回アジア卓球選手権大会	ホープス女子	優勝
H2	全日本卓球選手権大会	カデット女子	優勝
H3	地球ジュニア卓球大会	カデット女子	優勝
H3	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H4	東北中学校卓球大会	女子シングルス	優勝
H4	全国中学校卓球大会	女子シングルス	優勝
H5	全国スポーツ少年団交流卓球大会	女子シングルス	優勝
H5	フランスユースオープン	女子ダブルス	優勝

○高橋美貴江

S62	全日本卓球選手権大会	女子バンビ	優勝
H2	全日本卓球選手権大会	ホープス女子	5位
H3	地球ジュニア卓球大会	ホープ女子	2位
H3	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H5	"	"	優勝
H5	東北中学校卓球大会	女子シングルス	2位
H5	全日本卓球選手権大会	カデット女子ダブルス	3位
H6	東北中学校卓球大会	女子シングルス	2位
H6	全日本卓球選手権大会(中3)	ジュニア女子シングルス	5位

○今福 愛

S62	全国ホープス卓球大会	女子団体	3位
S63	全日本卓球選手権大会	女子カブ	5位
H元	全国ホープス卓球大会	女子団体	優勝
H2	全日本卓球選手権大会	ホープス女子	5位

○藤田 小夜

H元	全国ホープス卓球大会	女子団体	優勝
H3	地球ジュニア卓球大会	カブ女子	3位
H3	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H5	全日本卓球選手権大会	ホープス女子	3位
H5	全日本卓球選手権大会	カデット女子	5位(小6)
H6	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H7	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝

○今福 久美

H3	全日本卓球選手権大会	バンビ女子	3位
H4	"	バンビ女子	優勝
H5	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H6	"	女子4部	優勝
H6	全日本卓球選手権大会	カブ女子	3位
H7	全日本クラブ卓球選手権大会	女子4部	優勝
H8	東アジアグランプリ杯ホープス卓球大会	女子団体 日本Aチーム	3位

〈活動計画〉

練習時間 週6回 19:00~22:00

〈回数、時間…自由選択〉

〈クラブのモットー〉

・努力・燃えて挑戦・他人への思いやり・挨拶は大きな声で元気よく

〈年間の予算額〉 80万円

〈今後の抱負〉 普及と底辺拡大 低年層には楽しい卓球

全国で活躍できる選手の育成

〈事務局所在地〉 二本松市若宮1-346

TEL 0243-22-2852

FAX 0243-23-4326



〈その他〉

平成4 文部大臣表彰 (スポーツの振興) (三浦卓球クラブ)

平成10 文部大臣表彰 (三浦勝美) (社会体育の普及・振興)

福卓会の組織と活動

監督 柴田 広道

○代表者 柴田 広道

○発 足 昭和63年3月

会 長 吉原 清隆

顧問 橋本義一、深谷秀三、大藤 務、古山 浩、横山 実、斎藤一美

選 手 佐藤敏行、田子光政、大内雅之、原 晃、岩本爾郎、落合茂幸、本間尚雄

以上15名で結成し今日にいたる。女子部が平成2年にスタートした。

○役 員 監督 柴田 広道

総 務 本間 尚雄

主 務 岩本 爾郎

男子主将 原 晃

女子主将 東 條 由美

○会 員 男子 10名 女子 8名 (学生1名)

○会の目標

「全国優勝」と共に、若手中高校生の育成。

○主な目標

全日本クラブ卓球選手権大会 優勝 2回

平成4年 郡山市…佐藤、大内、原、落合、小澤

平成8年 北九州市…原、落合、深谷、馮、小澤

第3位 4回

個人戦 準優勝 原 晃 第3位 佐藤 敏行

日本クラブリーグ

優勝 4回 準優勝 2回 第3位 3回

最優秀選手 原 晃 1回 深谷 亮幸 3回

国 体

平成3年 石川成年男子2部 5位…田子、岩本

平成7年 福島成年男子1部 5位…原、深谷
同 同成年女子2部 優勝…東條
平成8年 広島成年男子1部 5位…原、岩本、深谷
平成10年 東京卓球選手権大会 男子サーティ 優勝 原 晃
○年間予算 10万円プラスアルファ
○抱 負 男女アベック優勝
○連絡先 960-8012
福島市御山町6-13 スミキビル 柴田 広道
☎・FAX 024-533-2299

セントラルクラブのあゆみ

総監督 斎藤 一 美

昭和54年4月1日、自宅に5台コートの卓球場を開設する。原町市から「日の丸選手！」を目標に『感激』を道場理念に掲げ、セントラルクラブを創設した。

一期生は高田文彦君ただ一人で、マンツーマンの指導こそ日の丸の近道と考え、中学の3年間、朝7キロのランニング、夜6時から9時30分まで、基礎中心に練習、2日以上以上の連休は遠征である。大人の世界に高田君一人だけでもまれた3年間は大変つらかったろう。回顧すること反省ばかりであるが、県中体連2位の実績で、全国屈指の強豪東京実践商業高校へ越境入学し、レギュラーで活躍し、日本大学卒業後、東京の外資系会社の営業マンとして大活躍しておるのが、せめてもの罪ほろぼしである。高田君を卒業させてから、部員構成は10人以上、高校は県外一流高校へ越境入学させる方針を立て、以後6人の選手を送り出し、それぞれのエースとして活躍してくれた。

平成3年に入り、「平成7年ふくしま国体」へ向けて、県の強化事業計画が決定した。当クラブも方針を改め、「当クラブから国体選手を！」を合い言葉に越境入学をやめ、小高工業高校とセントラルクラブを併合して強化を始めた。以後選手は全員小高工業へ入学することになる。県内のクラブも同様に強化に乗り出し、続々とライバルが現れたことも幸いし、当クラブも斎藤 亮が全日本バンビ、クラブで3位、全日本クラブ団体2位、柴田俊生が全日本中学5位に入賞するなど、全国でも知られるようになった。

平成5年、福島県のホープ遊佐充裕選手（平成4年全国中学大会5位）、高校入学の去就が県の注目の的であったが、所属クラブ（あづま卓球スポーツ少年団）の吉原清隆氏より当クラブへ入部（小高工業高入学）させていただいたのを機に、中国人トレーナー毛大宝氏を招聘し、2年間指導して頂いた。また、平成6年中国河北省より馮海濤選手を松栄高校へ留学させた。遊佐、馮、私の子ども3人が同宿し、道場の熱気あふれる中での練習で、一気に5人もの全日本ランキング選手が誕生した。ふくしま国体では、少年男子（遊佐、馮）3位、インターハイ2年連続2位の馮、全日本ジュニア5位の遊佐、特に、平成8年第48回東京卓球選手権大会ジュニアの部で、遊佐と馮が決勝戦で対決（遊佐2-1馮）した喜びは忘れられない。また、平成6年、斎藤 亮が全日本カデットで準優勝、翌年第43回世界卓球選手権大会（中国天津）に、ジュニア予備選手として「日の丸」をつけてくれたことは、クラブの夢を半分実現してくれうれしかった。

馮選手を除き、全員が小高工業高校へ入学し、大越弘之が、平成6年第20回全国高等学校選抜大会で優勝したのを機に、平成7年インターハイ団体でベスト16入りし、翌8年東北高校選抜大会で青森山田高校を3-0で破り、初の福島県優勝を飾った。平成3年より9年の選手は、3期生と呼んでいるが、数々の成績とよき思い出を作ってくれた黄金時代であった。この陰には創設と同時に20歳からコーチ専任で指導に当たっている高田信広氏、小高工業高OB会の諸氏、コーチ選手兼任で福島県卓球界若手のホープ原 晃君、ふくしま国体出場のため2年間在籍した大掛美奈さん、中国人毛大宝コーチ、

毛氏、馮君を紹介してくれ、これまで3度の中国遠征を含め、12年間指導してくれている徐向東氏、他多くの諸先輩、仲間のお陰である。

平成11年4月1日より、第4期生が船出したばかりである。これまでの経験を生かし、初心忘れることなく歩んでいきたい。

○スタッフ紹介

総監督 斎藤 一 美 (49歳) (株)セントラル住設代表取締役

ふくしま国体成年2部女子監督として優勝

監督 高田 信 広 (39歳) (株)セントラル住設勤務

コーチ(兼選手) 原 晃 (株)東京電力勤務

国体福島県代表として12回出場(入賞2回)

平成11年第51回東京卓球選手権大会 サーティの部 優勝

福島県のリーダーとして活躍

コーチ 柴田 俊 生 (株)福島ゼロックス勤務

○団体戦の成績

昭和63年 全国ホープス大会 第3位 (大越弘之、斎藤洋一、柴田俊生)

平成4年 全日本クラブ卓球選手権大会 男子4部 第2位 (柴田俊生、斎藤 亮、伊賀 誠)

平成4年 全国スポーツ少年団卓球交流大会 優勝 (大越弘之、斎藤 亮)

平成5年 全日本クラブ卓球選手権大会 男子4部 第2位 (大越弘之、斎藤 亮、柴田俊生)

平成6年 全国高等学校卓球大会 小高工業高校 ベスト16

(大越弘之、斎藤洋一、柴田俊生、遊佐充裕)

平成8年 東北高等学校選抜卓球大会 小高工業高校 優勝

(斎藤洋一、柴田俊生、佐藤正光、遊佐充裕)

○活躍した選手

高田 文 彦 (原町二中—東京実践商業高—日本大)

昭和52年 県中体連シングルス 第2位

二本松 俊 雄 (小高—東京実践商業高—日本大)

平成元年 全国高校選抜大会 団体 第3位

種村 明 美 (鹿島中—山形城北高—中央大)

昭和62年 東北高校大会 団体 2位 単3位

吉田 真 国 (原町一小—東京中野一中—東京実践商業高—法政大)

昭和62年 全国中学校大会 団体 第2位

村松 誠 一 (原町三中—東京実践商業高—法政大)

昭和63年 東北中学校大会シングルス 第2位

種村 恵 理 (鹿島中—山梨甲府商業高—中央大)

平成4年 山梨県高校大会 三冠王

大越 弘 之 (原町三中—小高工業高—中央大)

平成7年 全国高校選抜大会シングルス 第1位

柴田 俊 生 (原町二中—小高一—福島ゼロックス)

平成5年 全国中学校大会シングルス 第2位

斎藤 洋 一 (原町二中—小高一—愛知工業大)

平成3年 全日本カデット大会 複 第3位

遊佐 充 裕 (あづま卓球—小高一—愛知工業大)

平成3年 東北中学校大会シングルス 優勝

平成8年 東京卓球大会ジュニア 優勝

平成11年 大阪国際大会 ダブルス 第2位

馮 海 満 (中国石家荘体育学校—松栄高—大正大)

平成7、8年 全国高校大会シングルス 第2位

平成8年 東京卓球大会ジュニア 第2位

伊 藤 絵 美 (原町一中—小高工—日立多賀工場)

平成9年 国民体育大会 少年女子 第5位

斎 藤 亮 (原町二中—小高工—東邦学園)

平成6、7年 東北中学大会シングルス 第2位

平成6年 全日本カデット大会 第2位

平成9年 東北高校大会 ダブルス 第2位

村 松 伸 彦 (原町三中—小高工業高)

平成6年 全日本卓球大会カブ 第5位

伊 賀 禎 (原町一—原町一中)

平成7年 全日本卓球大会カブ 第5位

○OB紹介

二本松 賢 治 (相馬農高)

大 越 秀 一 (小高工—千葉商科大)

松 井 和 子 (原町高—昭和女子短大)

種 村 明 彦 (鹿島中—日大山形高—中央大)

松 坂 健 二 (小高工—東京電力)

吉 田 三 起 (原町高)

佐 藤 美 幸 (小高工—札幌女子短大)

佐 藤 正 光 (小高工—東北福祉大)

斎 藤 卓 也 (小高工—中国第二外国大)

鈴 木 誠 (小高工—ブティック店員)

門 馬 千 恵 (小高工—㈱栄製作所)

中島TTSの活動

代 表 中 島 静

- 設立年月 昭和57年4月 若愛クラブ
昭和62年4月 中島TTS (名称変更)

○役員と指導者

総監督 中 島 静

監督(コーチ) 中 島 龍 一

マネージャー 鈴 木 弥 生 薄 文 子

コーチ 関 本 さつき 大 島 和 彦 米 山 貴 之

- 構成人員 男 小学生 5名 中学生 2名
女 小学生 3名 中学生 4名

○成 績

福島県卓球選手権大会女子団体ホープスの部で3年連続優勝～昭和58、59、60年

58年 大河原加代子、鈴木 紀子、小林めぐみ、薄 香織

59年 薄 香織、長谷川まり子、薄 香澄、小林 和美

60年 長谷川まり子、薄 香澄、小林 和美、鈴木 直美

シングルス活躍メンバー

田崎 恵、大河原加代子、薄 香織、長谷川まり子、薄 香澄、中島 龍一、物江 真理、

物江 真希、久力 亜矢、中島 仁、渡部 諒子、鈴木 未央、大堀美奈子、角田 大樹

- クラブのモットー 一球入魂

○ 年間の予算

年 会 費 3千円×14名×12月=54万円
 強化練習会 5千円×14名×6回=42万円
 各種大会費 3千円×14名×10回=42万円
 遠 征 費 1万円×14名×4回=56万円
 合 計 194万円

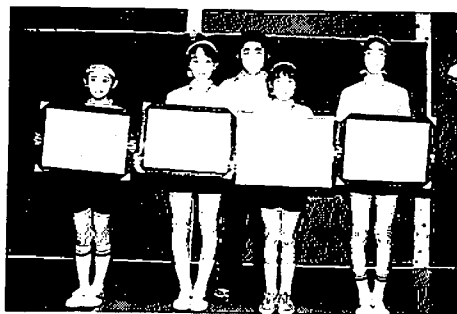
○ 今後の抱負

JAPAN・CHAMPIONをつくりたい。

○ 事務局所在地 FAX 969-6573

河沼郡会津坂下町大字大沖字大江2335

中 島 静 ☎・FAX 0242-83-1303



みやた卓球クラブの活動

代 表 宮 田 英 夫

- | | | |
|------------|---|--|
| 1 設立年月日 | 平成2年10月1日 | |
| 2 現在の役員 | 会 長 田巻 幸一
会 計 玄 恵子
監 督 宮田 英夫
コーチ 渡辺 貴史 太田原 保 丹野 哲也
田子 光輝 岡部 和恵 | |
| 3 活動状況 | 構成員 男子 佐藤 健介(中2) 佐藤 厚志(中2)
吉田 和真(小6) 馬越佑太郎(小6)
小野 翔平(小6) 後藤 拓也(小6)
田巻 隼一(小1) | 女子 馬越 恵子(中1) 田巻 翔子(小5)
玄 祥子(小5) 三浦 梨紗(小5)
石井加緒里(小5) 新妻由季子(小5)
新妻未佳子(小4) |
| 4 活動内容 | 練習日 週3回~4回 | |
| 大会参加 | 県ホープス大会
県強化リーグ大会・その他 | |
| 5 クラブのモットー | 創意・工夫・努力 | |
| 6 年間予算額 | 30万円(大会参加費・交通費は個人負担) | |
| 7 今後の抱負 | ライバルチームとして意識してもらえるよう努力 | |
| 8 事務局所在地 | 〒970-8026 いわき市平字作
町一丁目2-2
神田ビル201号
☎0246-22-0131 | |



勿来卓球クラブの活動

代 表 三 瓶 清 次

- 団体名称 勿来卓球クラブ（スポーツ少年団）
- 代 表 者 三瓶 清次
- 設 立 平成5年9月
- 指 導 者 三瓶 清次 三瓶ミツエ 落合 勝彦 渡辺 和奈
- 役 員 スポーツ少年団のため保護者会の役員組織あり
- 構成人員 小学女子8人 中学女子7人 計15人
- 過去の成績 主なもの（福島県大会）
 - 平成8, 9年総合体育大会小学団体 1位
 - 平成9年ホープス団体 1位
 - ホープス以下の部個人戦 1位 数回福島県内の大会では、そのほかにも小学生、中学生の部で優勝や上位入賞はいくつかある。ただし、県外の大会で成績を残した選手は出ていない。
- 活動計画 週4日の練習（各2時間）
各種大会への積極参加
- 年間予算 クラブ員1人1,000円／月としボール代その他
- 今後の抱負
スポーツで戦うには「勝ち」を意識しなければならない。そのためには、技術、体力、精神力を鍛え、強くならなければ。これまでは、県内ではある程度通用できるレベルまで育てることができたが、次のステップとして、もう一つ上の大会で活躍できる選手を育てることを目標としている。強くなれば、多くの人と交流し友情の輪が広がっていく。
子供たちと一緒に「夢」を追ってみたい。
- 事 務 局 979－0142
いわき市勿来町酒井字酒井原66－2
三瓶 清次
電話 0246－65－4717

古殿町卓球スポーツ少年団の活動

古殿町役場 鈴 木 良 一

- 代 表 者 本部長 鈴木 良一
- 設立年月 昭和51年4月
- 指 導 者 監 督 菅生 昌広
コーチ 矢内 伸一 本郷 正信 山本 勝
- 活動状況
団 員 数 小、中学生30名
団員相互の親睦と自己研鑽に努めると共に、各種大会に参加し友情を深める。団員の卓球技術の向上は勿論のこと、団員の健全育成のため、各種事業を開催している。特に、発足と同時に開催している「ふるどの小中学生卓球大会」は、毎年多くの参加があり、県内の卓球技術の向上と友好に多に貢献しているものと自負している。県内のみならず、東京、栃木、千葉、茨城、山形等県外の参加者も多く、県内の参加者と共に交流を図っている。卓球技術の交流と共に団員の家での民泊を通じ、心の交流を図っている。

○成 績

県大会を始め、東北大会、全国大会に参加、第1回全国スポーツ少年団大会では、第3位に入賞した。中体連全国大会個人16位入賞、東北大会個人優勝（渡辺厚子）、団体女子 準優勝、団体男子 3位（2回）がある。

スポーツ少年団終了者が高体連等で活躍した。

鈴木誠一（平工）我妻利真、最上幸夫（湘南工大付）吉田真久、渡辺家伸（学法石川）渡辺厚子（武蔵野）山本 勝、窪木清彦（学法石川）三瓶直美（日立明秀）

○今後の抱負

団員の健全育成は勿論のこと、他団体との交流を深め、一人の人間として立派に成長すること。

○事 務 局

石川郡古殿町大字松川字新桑原31

古殿町役場内 矢内 伸一

富久山卓球クラブの活動

代 表 深 谷 秀 三

富久山卓球クラブの発足は昭和63年で、今年で12年目になる。この間、たくさんの子供たちが入会し去って行った。発足の願いは、郡山市や県中地区から県を代表して活躍できる選手を育てたいということであった。趣味で卓球をしていた者が、自分の子ども以外の子どもを教えるということは、責任重大である。毎日が試行錯誤の繰り返しであったが、自宅に卓球場のある強みで、毎日練習できることを最大の武器に現在に至っている。現在は、小中高校生がほぼ同数ずついるので、一貫した指導ができるようになり、ある程度の成績が残せるようになった。今までの成績で印象に残るものを上げていく。

全日本クラブ卓球選手権大会

男子優勝2回

平成6年 渡辺 和幸、隆司、芳博の三兄弟

平成10年 渡辺 芳博、大和田直樹、松岡 達也

女子優勝2回

平成4年 菊地 弓子、今福 愛、荒井 沙織

平成9年 荒井 沙織、五十川美美、柏原 亜紀

女子個人戦 平成8年 3位 今福 麻美

全国スポーツ少年団卓球交流大会

団体 平成8年 3位 渡辺 芳博、大和田直樹、
柏原 裕治、五十川美美、
高橋 祥絵

個人 平成5年 男子2位 渡辺 和幸
女子5位 根本恵美子

平成7年 優勝 渡辺 隆司

2位 今福 豊

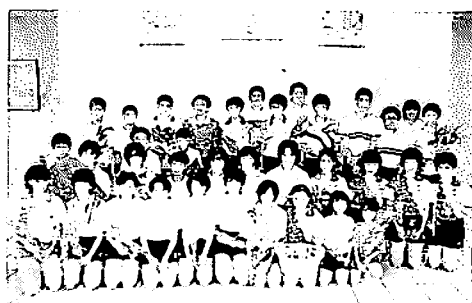
平成11年 優勝 渡辺 芳博

5位 大和田直樹

全日本卓球選手権大会（カデットの部）

女子ダブルス 平成9年 2位 五十川美美・高橋祥絵組

北日本ホープス卓球選手権大会



団体 男子3位 檜村 健太、松岡 達也、根本 岳、木村 裕樹

中体連、高体連の個人戦における優勝者

中体連シングルス優勝者 深谷 亮幸、深谷 純子、今福 愛、玉木 尚子、玉木 杏子、
大和田直樹

高体連シングルス優勝者 深谷 亮幸、今福 豊、深谷 純子、菊地 弓子、玉木 尚子、
五十川美美

ダブルス優勝者 渡辺 和幸・横田 敬春、横田 敬春・渡辺 隆司、
今福 豊・渡辺 隆司、根本恵美子・山木 成愛、
玉木 尚子・荒井 沙織
大和田ゆかり・美野佐知子

高校新人シングルス優勝者 深谷 純子、岩崎 力、菊地 弓子、渡辺 隆司、今福 豊、
玉木 尚子、荒井 沙織

ダブルス優勝者 深谷 純子・小川 音々、根本恵美子・山木 成愛、
横田 尊春・横田 敬春、横田 尊春・今福 豊、
渡辺 隆司・今福 豊、佐藤 友美・安斎 由美

など多数の選手を数えることができる。まだ、発展途上なので、これからも精進していきたい。